

## 親睦と奉仕

親睦を目的として出発したロータリーも、長く真摯な論議を重ねながら、大きな変貌を  
とげました。その結果、現在のロータリーの定款や細則の中から親睦の文字を見つけだす  
ことは難しく、僅かに親睦活動委員会の項目に、その痕跡を止めているに過ぎません。も  
はや、ロータリー・ライフの中で親睦は不必要になってしまったのでしょうか。

ロータリーの二本の柱として、ロータリアンのほとんどは親睦と奉仕をあげますし、新  
しいロータリー年度が始って、新会長の挨拶にも決って親睦と奉仕という言葉が述べられ  
ます。親睦と奉仕がロータリー・ライフを支える二本の大きい柱であることは、疑いのな  
い事実です。親睦が失われればクラブは崩壊するだろうし、奉仕がロータリー運動の大き  
な目的であることは疑いのない事実です。

しばしば、ロータリーで親睦を図ることが、ロータリー運動の全てであるように誤解さ  
れる。また、ゆらぎない親睦こそ、ロータリーが存続する絶対的条件だと考えているクラ  
ブもある。しかし、これらの二つの立場からの判断には、明らかに批判の余地がある。親  
睦はロータリー運動そのものではなく、ロータリーという植物が根をはり、成長するた  
めにどうしても必要な、最上の土壌に過ぎないのである。

[A Talking Knowledge of Rotary]

親睦を図りたければ、誰にだって無限の機会があります。気の合った仲間とゴルフや旅  
行に行くもよし、カラオケやバーでだって親睦を図ることができます。一人一業種だ  
なんて料簡の狭いことをいわなくても、同業者同士でも充分親睦は図れます。ロータ  
リアンになって、定例の会合に出席しなければ親睦が図れないと言う理屈を非ロータ  
リアンが聞いたら、こじつけとして一笑に付されるに違いありません。

ロータリーは敢えて親睦と奉仕の解釈を、世間一般の人たちが考える解釈と異なる次  
元に置いています。

世間一般の人たちが考える親睦と奉仕とロータリーが考える親睦と奉仕とに異な  
った解釈があることに気付いて、その言葉を広辞林で引き、更に、 **fellowship** や **service** の  
意味をウェブスターで調べたとしても、それは無駄な作業に過ぎません。ロータリー  
が定義する親睦と奉仕は、いかなる辞書を引いても正しい解釈が活字化されていない  
ロータリー独自の概念であり、さらに、それを正しく理解しない限り、ロータリー思  
想の原理を語ることはできないのです。

**fellowship** を [親睦] と訳したことにも問題があるかもの知れません。むしろ、[友情]  
とか [友愛] と訳す方が理解し易いでしょう。ちなみに、米山梅吉がポール・ハリス  
の **This Rotarian Age** を翻訳するに当たって、その書名を [ロータリーの理想と友愛] と  
したことは、理想=奉仕、友愛=親睦を意味するものであり、戦前のクラブ組織表  
では、親睦活動委員会の代わりに友愛委員会の名称が使われています。

ロータリーが定義する親睦とは、一体、どんなことなのでしょう。敢えて結論を先  
に述べれば、[親睦] とはロータリークラブが、クラブとして存続していく上で欠かすこと

出来ない必要条件となる、ロータリアン個人個人の心が結合した状態を表す概念なのです。

ワットの蒸気機関の発明を契機とした産業革命の結果、資本主義が発達し、19世紀後半から20世紀の初頭にアメリカに於いて、アメリカン・ドリームという美名の下でその爛熟期を迎えました。資本を蓄積した少数の人だけが成功者ともてはやされる、極端な資本主義の町では、同業者はすべて相手を蹴落とそうとするライバルであり、広告はすべて誇大か虚偽であり、濡れ手に粟のビジネス・チャンスはハイエナのごとく探し回る状態の中で、友情などが生まれる素地はまったくありませんでした。

その中で同じ価値観を持ち、共にすべてを語り合える仲間の集まりとして、ロータリークラブができたのです。

ロータリー運動の実体を、見事に表した言葉として、[入りて学び、出でて奉仕せよ Enter to learn, Go forth to serve] という言葉があります。世の中のあらゆる有用な職業から選ばれた裁量権を持った職業人が、一週一回の例会に集い、例会の場で、職業上の発想の交換を通じて、分かち合いの精神による事業の永続性を学び、友情を深め、自己改善を計り、その結果として奉仕の心が育まれてきます。この例会における一連の活動のことを[親睦]と呼ぶのです。例会で高められた奉仕の心を持って、それぞれの家庭、職場、地域社会に帰り、奉仕活動を実践します。これが理想とされるロータリー・ライフです。

[親睦と奉仕]の対比は、[理論と実践]、[奉仕の心の形成と奉仕の実践]、[クラブ内の活動とクラブ外の活動][原因と結果]にも対比させることができます。すなわち、ロータリー・ライフの一方の柱はクラブ内の活動を通じて行われる[親睦]すなわち[奉仕の心の形成][理論構築][ロータリー活動の原因]であり、これらのことを行う場は例会であり、もう一方の柱は、クラブ外で個々のロータリアンによって、家庭、職場、地域社会、国際社会を対象として行われる[奉仕活動の実践]であり、それが[ロータリー運動の結果]となるのです。

原因が無ければ結果は生じません。従ってクラブ例会を通じて得られる、ロータリーの親睦即ち奉仕の心の形成が欠けるとロータリー運動そのものが成り立たなくなることから、これに関係する幾つかの具体的な約束ごと、即ち、一人一業種制度や例会出席などはロータリー運動成立の必要条件と定められているのです。必要条件はロータリーの理論を構築する哲学であり、これを否定することはロータリーを否定することになるため、如何なる理由があつたとしても変更したり、勝手な解釈を加えることはできません。クラブの自治権に名を借りて、職業分類や出席規定の緩和が許されない理由もここにあります。敢えてこれを強行したければ、ロータリークラブの名前を返上するか、退会する以外に途はないのです。

最近の規定審議会で、これらの必要条件が次々と緩和される傾向にあります。ロータリー運動の中核はRIではなく、クラブと個々のロータリアンですから、RIがどの方向に進もうとも、クラブとロータリアンはこれらの必要条件を遵守する必要があります。

これに対して、[奉仕の実践]は充分条件であり、時代の推移と共に奉仕の実施方法や内容が変化してきたことは、ロータリーの歴史がこれを物語っています。個人奉仕が原則と

されながら、クラブによる団体奉仕が条件付きで認められ、非金銭的奉仕が原則とされながら、WCSやロータリー財団活動において金銭的奉仕が認められているその一例です。

充分条件に属する事柄については、敢えて親睦を壊すような議論は避けて、妥協と調和を図ることをロータリーの寛容の精神と考えています。

ロータリーにおける親睦が、何故、奉仕の心の形成と同義になるのか、更に一人一業種制度や例会出席などが、何故、親睦のカテゴリーに入って、なおかつ、ロータリー運動成立の必要条件になるかについて、更に深く考えてみたいと思います。

ロータリーは一人一業種の職業分類に基づいて、会員を選挙します。ロータリーの例会を通じて学んだ奉仕の心を、地域社会のあらゆる職種の人に分け与えるために、地域社会に存在する有用な職業の代表を、一人一業種としてなるべく多く選ぶことを意図したものであるとしても、一人一業種制を定めた根底には、同業者の競争意識や対立による親睦の阻害を排したいとするロータリーの友情があることは否定できません。

世に有用な職業をすべてを正業と考えるロータリーの職業観から、職業の貴賤や上下関係を認めていません。大会社の社長も小さな商店の店主も、元請けも下請けも、すべて平等であり、世俗の論理や縦社会のしがらみ一切を認めていないのです。すべての職業は価値あるものとする処に、すべての職業は尊重されなければならないという発想が生じ、それが職業倫理を高めるといふ奉仕の心の形成の発展していきます。ロータリアン同士はすべて対等と考えなければ、真の親睦は生まれません。親睦あるが故、或るときは師となり、徒となって、互に切磋琢磨しながら奉仕の心を形成する作業が可能になるのです。

資本主義を背景として生まれたロータリー運動は、最高の利潤を追求したいという利己心と、世のため人のために如何にすべきかという利他心を調和する哲学です。

永続性のある適切な利潤を獲得するために到達した経営哲学が「良質の職業人とは、自己改善を重ねて、自分の職場を健全に守ると共に、取引先・下請業者・従業員・顧客・同業者など、自分の事業と関係を持つすべての人に幸せを分かち合うことである。そして、その心を持って事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝えていく」という職業奉仕の理論を構築し、お互いがそれぞれの業界の職業情報を持ち寄ってその理論を実践する具体的な方法を研究するのが例会の場なのです。

学問上も実戦上も、経営方法や管理方法が高度に進化している現在、ロータリーの経営哲学のみに頼ることに不安や疑問を抱く人もいるに違いありません。確かに企業経営のノウハウは選択に迷うほど巷に溢れていて、ロータリーの経営哲学などは古典的なものに映るかも知れません。しかしそれらの新しい理論は、一時的に企業を隆盛に導く高度な戦略や戦術であったとしても、哲学として捉えるには、ほど遠い存在に過ぎないことは、バブルの時期にあれほど隆盛を極めた経営戦略や戦術が、いかに頼りないものであったかを証明しています。

それに反して、ロータリーが定義している職業奉仕は、事業経営を学問と捉えてそれを体系化したものであるだけに極めて完成度は高く、かつ、事例も豊富であり、その経営理論は永遠の真理である哲学の範疇に入るとも言えるでしょう。1927年からの世界大恐慌で

も、ロータリーの職業奉仕理論を真摯に捕らえて実践したロータリアンの落伍者が極めて少なかった事実がこれを証明していますし、バブル崩壊後の日本においても同じことが言えると思います。

1915年に発表された[ロータリー倫理訓]第6条に「もし疑わしい際には厳格な意味の責任義務を越えて一層のサービスを行うこと」という取り決めがあります。これを厳密に解釈すれば、販売した商品については永久に責任を取らなくてはならず、実行不可能とする反論が強く起こりました。しかし、敢えてこれに挑戦した企業も沢山あります。工具メーカー「スナッポン」社は、購入時期、場所を超越して、故障したら無償交換する原則を守った結果、最も信頼できるメーカーとして不動の地位を築いています。昨今やっとな話題になり始めた[製造物責任]や[リコール]の発想は、90年近くも前にロータリーが考えた職業情報なのです。

トップ・シークレットである企業情報を披露し、お互いの事業発展に利用しあう精神的互恵は、ロータリーの特徴的な制度であり、会員同士の友情に裏打ちされた信頼感がなければ、到底不可能なことです。不況のときこそ、他の会員の職業奉仕の実践例や職業情報を、積極的に自分の職場に生かす好機でもあるのです。

悩みごとを相談する真の友人こそロータリーの友でなければならず、それを可能にするためには、ロータリーの友情即ち親睦を更に高めなければなりません。もし、事業不振のため退会を余儀なくされる会員がいたとすれば、そのクラブにはロータリーの親睦がなかったことを証明することになるのです。職業上の相談はどんなことでもクラブ内の友人に相談できる。どんなことを相談しても、自分のマイナスになって返ってくることは絶対がない。これが可能のクラブのことを、親睦のあるクラブと言います。その前提となるのが一人一業種制度なのです。

奉仕の心はクラブ・ライフを通じて育まれますから、奉仕の心を形成する場は、クラブの正式な会合、即ち、例会ということになります。例会を通じて、ロータリアン各自が、高質で豊かな奉仕の心を培うためには、例会出席は欠かすことのできない義務であり、別な言い方をすれば、他のロータリアンに対する友情の証でもあります。

出席不良の会員や四回も続けて欠席するような会員から友情を期待したり、奉仕の心を語りあうことは不可能であり、そのような会員を放置することはロータリー運動そのものを危うくするという理由から、[退会]という最も厳しい措置が講じられるのも当然のことです。

定例の日時と場所で例会を開くことは、世界中のロータリアンに対する約束事であり、特別の事情がない限り変更したり中止してはなりません。親睦会や記念行事が特別の事情に当たらないことはいうまでもないことであり、例会とは切り放して行うべきでしょう。

メイクアップの期間を2週間に延長したり、理事会の裁量で、年四回の休会を認める措置は、ロータリー運動を成立させる絶対的条件に抵触するものとして、これを変更した規定審議会の責任は重大と言わざるを得ません。2001年の規定審議会で、クラブ理事会が認めた奉仕活動に出席した場合をメーキャップとして認めるという制定案が可決されましたが、ホーム・クラブの例会に出席しなければ、何の意味もないのです。「例会を取りやめる

ことができる」という表現は、必ずしも休会を強制する意味ではありませんから、例会出席を少しでも減らそうとするロータリアンに対しては、理事会は厳格に判断を下すよう留意すべきです。何れにせよ、軽々しく例会変更や休会をして、全世界のロータリアンの親睦を図る特権を奪うことがあってはなりません。

一人一業種で選ばれた会員が毎週開かれる例会に集って、お互いが師となり徒となって、奉仕の心を学び自己研鑽を重ねます。それをロータリー運動の一つの柱と考えて、それを達成するために試みられる、ロータリアン同士の真の友情に裏打ちされた凡ゆる活動のことを、ロータリーでは「親睦」と定義付けているのです。

ロータリークラブの会員の中にも、親睦と親睦活動を混同する人が多いようです。親睦会やゴルフ会に参加することは親睦活動に参加することであって、ここで述べる親睦とは違った次元のものです。親睦はロータリー運動を成立させる必要条件ですが、親睦活動はクラブ奉仕に属する充分条件の分野にあり、親睦会を欠席したからといって会員資格を云々されるべき性格のものではありません。

親睦活動がクラブ奉仕の充分条件の範囲内で、親睦というロータリー本来の運動を高めるために補助的に活動することは大切なことです。しかし、親睦活動委員の任務を、親睦会の幹事や同好会の世話役に留めることは大きな誤りです。確かに会員が心を打ち解けあう手段の一つとして、親睦会やクラブ活動などのリクリエーションも必要です。しかし、親睦を深める最適の場所は、毎週一回の定例の例会であることを忘れてはなりません。例会において、いかに友情を深めるかを考え実行することと、いかにして真の親睦が保たれるような環境を整備することが最大の任務なのです。

RIBI の推奨クラブ細則には、Fellowship Committee 親睦委員会とは別に Entertainment Committee 余興委員会が設けられており、親睦と親睦活動の違いが定義づけられています。

ほとんどのクラブでは、新入会員は親睦活動委員会に配属されます。これは、新人だから下働きに使おうということではなく、親睦活動委員として毎例会、会員相互の親睦を深める活動に従事することによって、一日でも早く、古い会員と融和を図ることを期待しているからなのです。

友情溢れる例会を通じて、ロータリアンがお互いに切磋琢磨し自己改善に務めることで、ロータリーの説く親睦が一層深まり、奉仕の心が高まっていきます。

---

[奉仕]には概念としての奉仕の心と、行動としての奉仕の実践の二通りの意味があり、親睦と対比して奉仕という言葉を用いるとき、それは奉仕の実践を意味します。前に述べた通り、奉仕の心を形成することと親睦とは同義語だからです。

奉仕活動の実践分野は、ロータリー理論の中にその原則が定められてはいるものの、実行に当たっては、クラブやロータリアンに或る程度の裁量権が認められる充分条件の範疇に入る活動ということができます。

しかし、ロータリーが定義する奉仕の概念は、親睦と同様に、世間一般の解釈とは大きな隔たりがあり、普通の解釈を試みてもその実体に迫ることは不可能です。

奉仕という言葉から受けるイメージは、戦争中なら勤労奉仕であり、現在なら、パチンコ屋の宣伝文句であり、一部の商人が好んで乱発する出血奉仕かも知れません。商人が使う[奉仕]という言葉からは、質の高い商品を感謝の気持ちを含めて適正な価格で売ったり、顧客の立場に立って満足のいく対応をすることではなく、売れ残りの商品や粗悪品をたたき売る感じが強く、ロータリーの奉仕とは似ても似つかないイメージを抱かせます。

Object を[綱領]と訳したことと同様に、Service を[奉仕]と置き換えたロータリーの翻訳に問題があるのか、奉仕を安売りの宣伝用語として乱発する一部の商人が悪いのかは別にして、Ideal of Service を[奉仕の理想]と訳するロータリー独特のいまわしは、ロータリアン以外の人にとっては難解なものと言えましょう。

Service と混同されやすい概念として、Volunteer と Charity があります。ボランティアは自立を促すことを前提とした援助行為を指し、その行為に対する対価の支払に関する明確な定めはありませんが、一般的には無償ないしは実費の場合が多いようです。チャリティは慈善行為であり、無償が原則です。

ロータリー用語としての Service を一言で説明するのは、非常に難しいことです。

奉仕という概念を最初にロータリーに導入したのは、1908年1月にシカゴクラブに入会したアーサー・フレデリック・シェルドンです。ミシガン大学で経営学を選考したシェルドンは、1902年にシェルドン・スクールを設立するに際して、自らの学校のモットーとして考えた He profits most who serves best をロータリーに提供しました。

シェルドンは「奉仕の原則と保全の法則」の冒頭で奉仕とは何かを定義しています。

奉仕とは

1. 仕事を管理する人たち(企業主)を管理すること。
2. 管理される人たち(従業員)を管理すること。
3. この両者に顧客を加えた集団を管理すること。

さらに、これに時間やエネルギーやお金や材料を無駄遣いせず有効に活用して保全することを付け加えることです。これはすべて安心と豊かな実りを獲得するための道です。世に有用な職業に従事している人は全員、奉仕によって品物を作り、それを売っているのです。すべての従業員は、人に役立つものを作り、雇用主はそれを売っているのです。役に立つこととは奉仕の別名なのです。

私たちが今まで使ってきた「奉仕」とはかなり異なった定義であり、世に有用な職業に従事して働く行動は、全て奉仕だと考えてもいいように思われます。

さらに「経営学」の中でシェルドンは、Service という単語そのものについて、あまりにも多くの意味を持った単語なので、一言で言い表すことは不可能であると前置きして、Service を受けた立場から得られる「満足感」と述べています。

Service をする立場からはどのように表現したらいいのでしょうか。「奉仕」という言葉が、パチンコ屋の出血サービスやバーゲン・セールを連想して、どうしても嫌ならば、これを「貢献」と訳すのも一つの方法かもしれません。

profits を得ることは、健全な職業生活を営むための絶対条件であり、適正な profits を得て、永続性のある事業を営む前提条件は継続的に利益をもたらす顧客を確保すること

です。「自分の幸せは、自分の周りにいる人々の幸せと、決して無関係ではない。良質の職業人とは、自己改善を重ねて自分の職場を健全に守ると共に、取引先・下請業者・従業員・顧客など、自分の事業と関係を持つすべての人に幸せをもたらすことである。そして、その心を持って事業を営めば、必ず最高の利益が得られることを自分の職場で実証することによって、奉仕の精神の必要性を地域全体の職業人に伝えていって、自分が属する業界全体の倫理基準を高める」という、シェルドンの職業奉仕理念に基づいた日常の職業生活のことを、ロータリーでは奉仕と定義づけているのです。

シェルドンは職業奉仕という言葉を使わずに、単に奉仕と述べています。経営学者であるシェルドンの頭の中にあるのは経営者が行う事業上の奉仕のみであり、他の奉仕活動は眼中になかったものと思われまます。

職業奉仕と名前がつき、倫理基準が強調されるようになったのは、1927年のオステンド大会における四大奉仕分割後のことです。

職業奉仕の特徴は、結果として、ロータリアン本人が受益者になり得ることです。職業奉仕を邁進することで、永続的に適正な利潤が得られることは、その利潤を適正に事業に関係する周囲の人々に還元するとしても、ロータリアン本人もその恩恵を受けることを意味します。

例会に遅れて来たり、早退する言い訳に、職業奉仕を引合いにだす人もいるが、これは不適切な表現です。昨今、自分の職業を生かしたボランティア活動を職業奉仕の範疇に入れる傾向が見られますが、これは、その対象によって、社会奉仕か国際奉仕に属する活動であり、職業奉仕ではありません。

---

社会奉仕、国際奉仕における「奉仕」は **Volunteer** に近い意味合いを持った **Service** であり、当然のことながら、その受益者はロータリアン以外の人を対象となります。実践面について、個人奉仕の原則や、団体的金銭的永続的奉仕の禁止などのロータリー独特の制約がつき、更に、単なる **Charity** を含めないことが他の奉仕団体の奉仕との差かも知れません。

弱者救済の手段として、「ほどこしの奉仕」 **Charity** は確かに即効制があって有効な手段かも知れません。しかし、飢えに苦しむ途上国に対する援助の例が物語るように、一度援助が開始されるとそれに頼りきるあまり、自助努力をする必要がなくなり、援助が途切れた途端、前にも増す悲惨な状態に陥るのが通例です。そうかといって、団体的金銭的永続的奉仕が原則的に禁止されているロータリーが、永遠にほどこしを続けることが可能でしょうか。

ロータリーの社会奉仕・国際奉仕は、受益者の立場に立って、その自助努力を助けるための **Volunteer** としての援助に限定されるべきだと思います。

---

クラブ奉仕の概念は更に難解であり、職業・社会・国際奉仕に語呂を合わせるために、あえて奉仕という言葉を使った感すら抱かせます。ロータリアンが受益者になることを例外とするロータリーの原則から、ロータリアンを構成員とするクラブに対する奉仕とは何か

という疑問が浮んできます。クラブの運営・管理が円滑に進むように、ロータリアン各自がクラブに協力することは当然の義務であり、それを敢えて奉仕と呼ぶのは不自然な感じ  
です。

クラブの正式な会合は例会であり、例会は「奉仕の心の形成」即ち「親睦」の場であつて「奉仕の実践」の場ではありませんから、クラブ運営に関して奉仕という言葉を使うことには、大きな矛盾が生じてきます。

中国語では Service に「服務」という文字を当てています。クラブ奉仕の奉仕は、むしろこの「服務」の意味で理解し、更にクラブ管理に限定した方が適切かも知れません。

青少年奉仕という言葉を用いる人も多いようですが、正しくは社会奉仕の一部としての「青少年に対する奉仕」 Service for Youth 乃至は「青少年活動」 Youth activity と呼ぶべきでしょう。ロータリーには青少年奉仕という概念は存在せず、奉仕は四大奉仕に限定されているからです。

ロータリーで頻用される奉仕の意味ですら、職業奉仕、社会奉仕、クラブ奉仕夫々で、大きく違うことが分かります。

世間には奉仕クラブと称する団体が数多くあり、それぞれが奉仕の必要性を説き、奉仕という言葉で吹聴してまわります。ロータリーが提唱する奉仕と、大売り出しの奉仕とが、全く異質のものであることが理解できない一般の人々にとって、ロータリーの奉仕と他の奉仕クラブの奉仕との違いは勿論のこと、ロータリーの四大奉仕の区別などできるはずもなく、巷に氾濫する奉仕の大合唱の中に、ロータリーの崇高な精神が埋没されていくのです。

Ideal of Service という言葉は、「奉仕の理想」という直訳的な日本語に置き換えられるほど単純な概念ではありません。

他人のために役立つと志す心意気「他人と全てを分かち合う精神」

私はこのような意味合いの解釈をしています。ポール・ハリスやシェルドンが、「その程度の解釈では・・・」と苦笑いをしている様が目に浮びます。いずれにしても、Service を適切な日本語で表現することは難しいことです。

ポール・ハリスは Ideal of Service に関連して、「自分が金品を得るという行為をする前に、他人に与えたり他人の役に立つ行為を行うことであるが、いざ、金品を前にするとその実行は難しさを増す。最も愚かな行為は金品に集中することである」と述べています。

子供は砂山作りに熱中する。しかしそれは、砂に希少価値があるからではなく、ほかの子供の砂山より、自分の砂山の方をより高く作りたいからである。子供は砂を積み、大人は黄金を積み上げるが、両者の動機に大差はない。持っていることは、持たざる人の羨望とねたみをより大きくするだけである。この二つのケースでは、少なくとも一つの点で、子供の方が聡明といえよう。砂を貯めても不愉快な影響は残らないが、黄金の蓄積には、ミダス王が晩年になって悲しみを悟ったような、不愉快さが残る。慾深い行為は奉仕の理想とは両立しない。

[This Rotarian Age] Paul Harris

ちなみに、米山梅吉はロータリー用語としての Service と、日本語の「奉仕」との間の微妙な差を感じていたらしく、This Rotarian Age の訳本「ロータリーの理想と友愛」で



は Service を [奉仕] と訳さず、あえて [サーヴィス] と、そのまま記載しています。

ロータリーはその思考過程の中で独特な奉仕哲学を確立しました。奉仕の心を形成するための自己改善の努力は、クラブ例会を通じて行われ、その過程で生まれてくるものがロータリーの親睦です。例会で培った奉仕の心を実践に移すのは原則としてロータリアン個人個人の責任であり、その受益者は地域社会全体の人たちです。ロータリーが定義する親睦と奉仕と、世間一般が考える親睦と奉仕とは、同名異質のものであることに留意しなければなりません。

「ロータリー精神は親睦と奉仕の調和の中に宿る」

1907年から1913にわたって続けられた、親睦か奉仕かをめぐる激しい論争の中で残された言葉通り、奉仕の心を育くむ原動力として、会員相互の親睦は決して欠かすことのできない大きな要素です。親睦と奉仕は相反関係にあるのではなく、相互に支えあいながら回転する二枚の歯車であると考えなければなりません。